

2003年

1月12日

産経新聞

著者に聞く

朝の短い時間しか当てられなかったものの、読了するのに一カ月余もかかってしまった。二千五百枚、千ページ。とりわけ戦後思想をまるごと描き切ろうとする構想の雄大さに圧倒される思いだが、著者自身は構想のことについては案外気にもしていないようだ。

小熊英一さん

『〈民主〉と〈愛国〉』〈新曜社・6300円〉

「手当たり次第というのが正直なところですよ。まず多くの思想家を一通り読み、カギになりそうな人を二十人くらいに絞り、さらにその中から何人かを選んで全集を読みました。それに同時代の雑誌も意識して読みました。時代の雰囲気は分かりますし、思想家同士の関係も見えてきます。要するにそういう人たちすべてがのっている時代が、です」
本書で小熊さんの試みるのは、丸山真男、竹内好、六〇年安保闘争、吉本隆明、江藤淳、小田実、さらには戦後間もないころ行われた「政治と文学」論争、国民的歴史学運動などの思想を解明することによって、戦後思想と呼ばれるものがいかに自身を展開させ、変容してきたか



おぐま・えいじ 慶応大学総合政策学部教授。昭和37年、東京生まれ。東京大学農学部卒、同教養学部大学院博士課程修了。『単一民族神話の起源』『〈日本人〉の境界』『インド日記』などの著書がある。

を明らかにすることである。そうした展開と変容の中で、今では左派用語となった「市民」が初めプチブル（小市民）的として肝心の左派から毛嫌いされたこと、逆に共

産党のスローガンの一つであった「愛国」が、今ではどうやら右派に囲い込まれたこと…など昨今の「公を

てきたことも跡付けられる。「」で戦後思想というのは、だれもが避けることのできなかった戦争体験と戦後体験とをどうにかして言語化、思想化したものことです。総力戦を謳いながら肝心の国民の力を総力戦に結集できなかった戦時指導者の近代以前性を批判した丸山真男、単なる軍国少年ではなく応召か進学かで悩みながらそのことは表に出さず、丸山らの戦後思想家を批判した吉本隆明…」

だから当然、終戦時に三十代以上の生活者だった者、二十代だった者、皇民教育にとっぷりと浸った十代後半だった者、前半だった者、軍隊経験のある者、ない者、空襲経験のある者、ない者…によってそれぞれの戦争体験、戦後体験の質は大いに異なる。本書はすぐれて世代論的方法を駆使した戦後思想論ともいえる。

稲垣真澄

戦後思想の展開と変容を解明